

敘事詩「ラ・アンリアード」——作品研究——

高橋安光

われわれは優れた小説が現れる時しばしば「これこそ現代の偉大な敘事詩である」という形容を用いる。その場合われわれは、敘事詩とはあらゆる文學形式の中で最も古く従って最も人間的であり然かも最高の形式なるが故に最も創作し難いものである、と信じているかのようだ。しかし「現代の敘事詩」という表現の裏には古來の敘事詩を今日の創作様式と認めることの不可能が意味されている。勿論このことは文學史上における敘事詩の偉大な地位を否定するものではないが、古來の神話や傳説の否定にはじまる近代社會の建設者たちの理想を表現するものは敘事詩という表現形式ではなかった。しかし文學形式が歴史の歩みとまったく歩調を合せるものではないことも眞實であるから、ダンテ、カモーンニス、タソ、

ロンサール、ミルトン等近世より近代にかけてのヨーロッパに大敘事詩作家が出現したことは、なんら奇蹟的現象ではないのだ。それだけに、歴史の進歩が文學史上に反映される決定的時期を測定することは極めて困難な仕事となり、文學史研究という學問そのものの必要が起ってくる。しかも歴史的事實は一つであるが歴史理論は一つでないように、文學的事實は一つであるが文學史理論は一つではない。こゝに學問の歴史的現實による制約を認めなければならぬ。こうした制約にたいする認識が科學の基礎であり、同時に科學自體の發展の契機でもある。論を文學的領域に限定するならば、眞に文學を人類の所有物たらしめたものは印刷術の發明であつた。古代及び中世の文學的遺産がそれによって再現されたとする

ば、前述の敘事詩の一見奇蹟的な復活もなら異とするに足らぬどころか、當然のことであり、しかもそうした復活がまた急速に消滅する理由も明瞭であろう。したがって次に到來したものが古典主義文學であることは、もはや古代の復活を意味するものではなく、決定的に近代の進歩を意味するはずである。しかも古典主義的悲劇及び喜劇の成立のかけにはすでに近代小説の萌芽をも認めなければならぬのだ。こうした文學的現象の進展はいかなる作家にも多少とも影響を與えずにはおかない。この振幅をきわめて敏感に看破した人々こそ真に天才的な文學者と言えよう。だが、いかなる天才といえども、そうした振幅によつて多少とも歪みを與えられないものはいない。私がそうした天才の一人としてヴォルテールを持ち出した所以は、彼における振幅をきわめて典型的と考えたからである。したがってヴォルテールには近代古典主義的色彩が濃厚であると同時に反古典主義的傾向も強烈に認められるのだ。私はこの矛盾を貴重に思う。しかも彼の作品の中から数多い古典主義的悲劇作品を取りあげずに敢えて敘事詩（すでに死物と化したはずの）を

取りあげた所以は、それだけ一層はつきりと彼の矛盾を證明しようように思われたからである。敘事詩「ラ・アンリアード」が現れたのは十八世紀初頭ではあるが、すでにルイ大王は死に近代専制君主國家の弔鐘が鳴りわたった後であり、大革命への苦惱にみちた半世紀の道がひらけはじめた頃であつたから、この作品のもつ矛盾の意義は大きい。私は以上の觀點から次の順序で論及したい、(一)詩人ヴォルテール、(二)「ラ・アンリアード」成立事情、(三)本詩の構成及び内容。

フランスの十八世紀は從來文學史上もつとも詩的でない時代と見なされ、その代表的人物としてヴォルテールも詩想に無縁な人と考えられてきた。狹義の詩の意味ではたしかにそう言えよう。だが廣義の意味におけるポエジーとは創造である。とすれば、文學史上の通念は近代社會の發展史上で果した十八世紀フランスの役割を正しく表現していないことになる。しかも狹義の意味における詩の領域においても十八世紀フランス文學研究は等閑

にふされすぎている。イギリスのヴォルテール研究家として有名であったモーレイの言葉に「ヴォルテールはイギリスに渡る時は詩人であったが、歸る時は思想家であった」という文句があり、よくフランスの批評家あたりから「イギリスに渡る前から思想家であった」と反駁されるが、私は敢えてこう言いたい、「ヴォルテールはイギリスに渡る前も歸つて來てからも終始詩人であった」と。處女作の韻文悲劇「エディプ」(一七一八年)を携えて文壇に登場したヴォルテールは夥しい詩劇を創りつづけ韻文悲劇「イレーヌ」の上演を見ながら死んでいったのだ。成功不成功は別としてヴォルテールがたえず情熱をかたむけつづけたのは舞臺における詩作であった。「イギリス便り」、「シャルル十二世の歴史」、「ルイ十四世の世紀」、「哲學辭典」等は或る面でそうした彼の詩作の副産物とも言えるのである。こうした彼の詩劇にたいする執念は前世紀を飾った大古典主義文學によって培われたものであることは論を俟たぬが、また反面にはそうした執念をかきたてる當時の文壇の趨勢に依るものでもあった。

私はヴォルテールの生い立ちについてデヌワレストー

敘事詩「ラ・アンリアード」

ルの優れた傳記研究から興味ある事柄を以下に簡単に紹介してみよう。十七世紀フランス古典主義理論の立役者たるボワローが世を去ったのはヴォルテールがパリのエスイッタ派が經營するルイ・ル・グラン學院を卒業した年であった(一七二一年)。裁判所の書記職を人に譲って會計院の役人となったヴォルテールの父アルエが妻子と共に移り住んだ所が奇しくもボワローの住居(エルサレム街)の直ぐ傍であった。當時ヴォルテールは七歳にしかなくていなかったし、それから三年後には學院に入學して寮生活に入つたから、ボワローを見知る機會をもたなかったが、ボワロー家に入出入の庭師を知っていたし、ボワローの甥にあたるドンゴワという人物の家に遊びに行つたこともあるのだ。ヴォルテールの母は彼にこう言つて聞かせたそうだ「あの人(ボワロー)は立派な物識りだが馬鹿なお人だよ」と。また父アルエは職掌柄ボワロー死去の際には遺産相續等の問題でボワロー家に入入した。何故にこうボワローとの關係を詮索するかなれば、あの毒舌家ヴォルテールが全生涯を通じて一貫して尊敬しつづけた極めて少數の作家の一人がボワローであつ

たからだ。

また父アルエは大コルネーユと酒を飲み交したことがあるとされているから、單なる小役人ではなかつたはずである。事實、ヴォルテールを有名なニノン・ド・ランクロ女史のサロンに連れて行つてくれたシャトーヌーフ神父なども父の友人であつたのだ。こうした家庭環境からルイ・ル・グラン學院に入學したヴォルテールはそこでボレ神父やトゥルヌミーヌ神父などからギリシャ・ラテン文學の講讀や宗教劇の實演を指導されて始めて文學青年の第一歩を踏み出したのだ。學院における彼の唯一の楽しみは劇作にあつたから、若冠廿四歳にして悲劇「エディプ」の成功を獲得したことも不思議ではなからう。だが私はこうした悲劇詩の作家としてのヴォルテールを以て詩人ヴォルテールのすべてと考へるのではない。ヴォルテールには「ラ・アンリアード」並びに「オルレアン註(三)の處女」という二大敘事詩を始めとして多數の諷刺詩、寸鐵詩、書簡詩、戀歌、碑銘詩註(四)があり、就中、即興詩は彼の得意とする所であつた。もしヴォルテールの才能がこの領域においてより強く發揮されていたら

らば、十八世紀フランス文學にたいする後世の通念はかなりの變更をよぎなくされたかも知れない。私は次にヴォルテールの詩集の中から興味深い詩を二・三紹介しておきた註(四)。

Sans doute vous serez célèbre

Par les grands calculs de l'algèbre

Où votre esprit est absorbé;

J'oserai m'y livrer moi-même;

Mais, hélas ! A+D-B

N'est pas = à je vous aime,

[A Mme la marquise du Châtelet]

〔意譯〕

おそらく貴女は有名になりましょう

代數學の大計算によつて、

貴女の精神はそれに夢中だから。

私自身もそれに打ちこみたいが、

さて悲しいかな！ A+D-Bは

「貴女を愛す」にイコールと参りません。

〔シヤトレ公爵夫人に〕

プロシヤ國王フレデリック二世とヴォルテールとの關係はかなり邦譯文獻で紹介されているから省略するとして、こゝにはヴォルテールが彼に宛てた別離の詩を擧げよう。

Non, malgré vos vertus, non, malgré vos appas,
Mon âme n'est pas satisfaite ;

Non, vous n'êtes qu'une coquette

Qui subjuguez les cœurs, et ne vous donnez pas.

[Au Roi du Prusse]

〔意譯〕

否、貴方の勇氣、魅力を以ても

私の心は満たされなく。

否、貴方はコケットにすぎなく。

人の心を征しても、自分の心を興えなく。

〔プロシヤ國王に〕

この大膽な皮肉にたいしてフレデリックはこんな詩を書きつけている。(参考までに引用)

Mon âme sent le prix de vos devins appas ;
Mais ne présumez pas qu' elle soit satisfaite,
Traître, vous me quittez pour suivre une coquette ;

Moi, je ne vous quitterais pas.

また變つたところでは有名なフィシオクラートの大立物チェルモに關する即興詩などは興味深いものである。

Je crois en Turgot fermement :

Je ne sais pas ce qu'il veut faire,

Mais je sais que c'est le contraire

De ce qu'on fit jusqu'à présent.

〔意譯〕

私は斷乎としてチェルモを信ずる。

彼が何をしようとするか私は知らなく。

敘事詩「ラ・フシリブール」

だが私は知つてゐる、それは
今まで人のなしたものと反對であることだ。

これと同様な即興詩はネットケルにも幾つあったらう。
さて最後に私はおそらくヴォルテールの最後の詩である
と想われるものを引用しよう。

Adieux à la vie

Adieu ; je vais dans ce pays
D'où ne revint point feu mon père.
Pour jamais adieu, mes amis,
Qui ne me regretterez guère.
Vous en rirez, mes ennemis :
C'est le requiem ordinaire.
.....(5行略)
Quand sur la scène de ce monde
Chaque homme a joué son rôle,
En partant il est à la ronde
Reconduit à coups de sifflet.

Dans leur dernière maladie

J'ai vu des gens de tous états,

Vieux évêques, vieux magistrats,

Vieux courtisans à l'agonie :

Vainement en cérémonie

Avec sa clochette arrivait

L'attirail de la sacristie ;

Le curé vainement oignait

Notre vieille âme à sa sortie ;

Le public malin s'en moquait,

La Satire un moment parlait

Des ridicules de sa vie ;

Puis à jamais on l'oubliait \

Ainsi la farce était finie.

.....(2行略)

Petits papillons d'un moment,

Invisibles marionnettes

.....(2行略)

Dites-moi donc ce que vous êtes.

Au terme où je suis parvenu,
 Quel mortel est le moins à plaindre ?
 C'est celui qui ne sait rien craindre,
 Qui vit et qui meurt inconnu.

〔意譯〕

生への別れ

さらば、われはかの國に行かん、
 わが亡き父の戻らざる國へ。
 永遠にさらば、わが友達よ、
 彼らわれを惜むことなからん、
 わが敵供よ、君らはわれを笑うべし、
 こはありきたれる鎮魂曲なり。
 ……………(5行略)
 この浮世の舞臺にのぼりて、
 人それぞれ自らの役目を終る時、
 彼らはつぎつぎに立ちて、
 口笛に吹かれて退場する。
 われは見たり、死の床にいし
 あらゆる身分の人々を。

敘事詩「ラ・アンリアード」

年老える司教、年老える法官、
 年老える宮人の惱めるを。
 はかなき儀式もて
 鐘の音に訪れたる
 きらびなる聖器。
 司祭はむなしく聖油をそよぐ
 去り行くわれらが老いたる魂に。
 心なき人々はそをあざけり、
 ひととき諷刺は語る
 彼の笑うべき生涯について。
 やがて永遠に忘れられ、
 かくて笑劇は終りぬ。
 ……………(5行略)
 つかの間の小さき蝶よ、
 人目にふれぬ操り人形よ、
 ……………(2行略)
 されば君の正體をわれに明かせ、
 死にのぞみ、われまたしかり。
 何人がよく悔まざるか。

そは何事も恐れることなく、
無名に生き死する者なり。

この他にラテン語や英語で書いた詩も若干見うけられるが、それだけに物好きな趣好が目立ち、ヴォルテールがこの領域に精魂をかたむけたとは言えない。したがって機智と警句に富んだ彼の小詩群は好奇心の對象を遙かに超えるものではないのだ。だが詩作がヴォルテールの日常坐臥の生活にまで浸透していたことは充分に認めなければならぬ、たとえ、そのためには彼の詩がやゝ低俗安易の道を通ったとしても。つまりヴォルテールは詩人としての楽しみをよく知っていたのである。このことは彼の尨大な劇詩および敘事詩を論ずるためにも閑却してはならないのだ。

註(一) 彼は前代の偉大な劇詩人コルネーユやラシーヌを敵にまわして争うよりは彼と同時代の詩人たちと張り合うほうが勝味が多いことを「ラ・アンリアード」執筆の動機として率直にみとめている。「もし私が間違っているのならば、私にとってはラシーヌやコルネーユに比肩せねばならぬコースを進むよりはシャプランやラ・モットやサ

ン・ディディエを競争相手とするコースの方が遙かに進みやすい」(一七二四年十月七日付、チリオ氏宛書簡) [cf. *Œuvres de Voltaire*, éd. Beuchot, tome 51, p. 159]

註(二) *Gustave Desnoïsteres: Voltaire et la société au 18^e siècle* (3 vols., 1867—1876) 私が主として利用したのはそのうちの *La jeunesse de Voltaire* 「ヴォルテールの青春時代」(一八七一年刊行)である。

註(三) *La Pucelle d'Orléans* 初版は一七三〇年、私が使用したテキストは一橋大學圖書館「メンガー文庫」中の一七六五年の改訂版である。その版の序にヴォルテールはこう述べている。「われわれはこの小冊子が當代の貴婦人や多くの僧侶たちを悩ましておる毒氣にたいする効果テキメンの治療薬である」と信じている」と。したがって全篇二十歌章より成るこの敘事詩がオルレアンの處女ジャンヌ・ダルクをめぐる事件を通じて十八世紀のタイハイした社交界を諷刺した作品であることは勿論である。それは「ラ・アンリアード」には見られぬ官能的描寫に富み、前者とは別途の研究が要請されよう。

註(四) 以下にかゝるヴォルテールの詩はすべてつぎのテキストから引用された。*Œuvres de Voltaire*, Paris, Hachette, 1893, t. 7 (p. 295—p. 404)

ボワローは「詩學」L'Art poétique（一六七四年）の中で敘事詩についてこう述べている。

「敘事詩は悲劇よりもなお一層壮大な風格をそなえ、その筋の長い廣大な説話において寓話フレイブルに支えられ假構フイクションに生きるものである。そこでは吾人を魅了すべく一切のものが利用される。あらゆるものが肉體・靈魂・精神・容貌をもつ。美德長所はそれぞれ一個の神となる。ミネルウアは慎重であり、ウエヌスは美である。雷鳴を生み出すものは蒸氣ではなく、大地を驚怖させようと武装せるユピテルである。……このように、高貴な假構の集積においては、詩人は限りなき創意に耽り、すべてのものを飾り立て、高揚し、美化し、誇張する。」

ボワローはこう定義づけた。しからば、あらゆる面においてボワローに私淑したヴォルテールは一體どう考えていたか。

「敘事詩はいかなる所にあつても判断力に立脚し想像力によって美化されなければならぬ。良識に屬するものは全世界の國民にひとしく屬するものであるから。」(cf. «Essai sur la poésie épique» 1728. 1^{er} chapitre)

敘事詩「ラ・アンリアード」

「敘事詩を知るためにはウエルギリウスやホメロスを読んだだけでは充分ではない。それはちょうど悲劇についてソフォクレスやエウリピデスを読んだだけでは充分でないように。」(ibid.)

このヴォルテールの見解は「ラ・アンリアード」の決定版とも見なすべきロンドン版（一七二八年）と同年に發表されたものであるから、それは本作品創作期を通ずる彼の一貫した敘事詩觀と見なされよう。すなわち彼はボワローと同様に想像力による美化を主張すると共に更に普遍的な合理性を敘事詩に要求したので。

一般にヴォルテールが「ラ・アンリアード」を書こうとした直接的動機はラベ・デュボス L'abbé Dubos の示唆によるものと考えられている。それはヴォルテール自身が「ルイ十四世の歴史」（一七五一年）の中でこう述べているからである。

「一七一九年頃、詩と繪畫に關する論説を書いた偉大な感覺の持主ラベ・デュボスは、フランスの全歴史の中で敘事詩の眞實の主題はアンリ大王による同盟リイの破壊のみであること」を發見した。」(cf. «Le siècle de Louis

XIV) chapitre XXXII)

ヴォルテールは「一七一九年頃云々」と述べているが、事實、ラン・デュボスの論文《Réflexions sur la poésie et la peinture》は一七一九年に發表されてゐるのだ。しかもヴォルテールが彼の書簡において「ラ・アンリアード」のことに觸れてゐるのも一七一九年ミムール公爵夫人宛のそれが最初であるから、ラン・デュボスの優れたアイデアが彼の文學的野心を強く刺激したことは事實と見なすべきであろう。

こうした直接的動機以外に一般的な動機を考察して見る餘地はないであろうか。「ラ・アンリアード」はブルボン王朝の確立者アンリ四世の數奇な運命を敘することによって一種の君主論を展開してゐるのだ。「名君とはいかにあるべきか」という君主教育の意圖が明らかに存在するのである。それを裏書きするかのようには、ヴォルテールの死後であるが、一七九〇年につきのような興味深い表題をもった版が出された。

La Henriade, Imprimé par ordre du roi, pour l'éducation de Monseigneur le Dauphin, éd. P.

Didot, 1790.

「ラ・アンリアード、皇太子の教育のために、國王の命によって印刷さる。ヘ・チド版、一七九〇年刊」^(註三)こうした意圖はフェヌロン作「テレマック」(一六九九年)を想起させる。フェヌロンがこの作品のもつ烈しい君主批判の故に國王の寵を失うまでに到ったことはあまりにも有名である。ヴォルテールがこの作品をいかに重視していたかは次の言葉によっても明らかだ。

「人はテレマックのうちにルイ十四世の治世にたいする間接的批判を見出しうると信じた。」(cf. 《Le siècle de Louis XIV》 Chapitre XXXII)

とすれば、ヴォルテールも讀者が「ラ・アンリアード」のうちに當時のオルレアン公による攝政政治にたいする間接的批判を見出しうると信ずることを秘かに期待していたと言えないであろうか。また前述の一七九〇年版はそのヴォルテールの意圖を忠實に反映したものと云えないであろうか。

また内容形式ともかなり相違するにもかかわらずボワローのヒロイ・コミック詩「リェットラン」(一六八三年)

と「ラ・アンリブード」の類似性を指摘することも無意味ではなからず。兩詩篇の冒頭を並記するならば、

〔リキエラン〕

Je chante les combats, et ce prélat terrible,
Qui, par ses longs travaux et sa force invincible
Dans une illustre église exerçant son grand coeur,
Fit placer à la fin un lutrin dans le choeur,

〔ラ・アンリブード〕(一七二三年版)

Je chante les combats, et ce roi généreux
Qui força les Français à devenir heureux,
Qui dissipa La Ligne et fit trembler l'Idère,
Qui fut de ses sujets le vainqueur et le père,
(一七二八年版)

Je chante ce héros qui régna sur la France
Et par droit de conquête et par droit de naissance
Qui par de longs malheurs apprit à gouverner,
Calma les factions, sut vaincre et pardonner,

敘事詩「ラ・アンリブード」

單なる字句の類似と言いつ切るにはあまりにもボワローとヴォルテールの影響關係は大きすぎるのだ。しかも次のような版が存在することは、この類似を單なる類似以上のものと推定させる理由を提供している。

Parallèle de la Henriade et du Lutrin, (1746)

〔ラ・アンリブードとリキエランの對照、一七四六年刊〕

以上によつて、ロンサールの「ラ・フラシブード」は言わずもがな、ヴォルテールが「ラ・アンリブード」を執筆するさいにはたらいだ直接的動機および一般的動機の一端をうかがい知ることができよう。

だがヴォルテールが「ラ・アンリブード」を書きはじめた時機については次のような風説(かなり強く信じられてゐるのだが)が存在する。すなわち、オルレアン公を諷刺した罪を問われて(これも事實に反する面があったようだが)バスチーユに投獄(一七二七年)されたヴォルテールはその獄中においてこの敘事詩を書きはじめた、という説である。この説の反對者はペンもインキもない獄中では不可能であつたと反駁するし、贊成者は鉛

筆でも書けたと主張し、さらに反對者が紙がなかったたではないかと反論すれば、一方は木片に書きつけたとか記憶の中に書きつけたという苦しい答辯を行った。獄中における執筆といえは英雄的なエピソードとしては恰好なものだが、この説は甚だ疑問である。つまり前述せるように彼自身の告白によってもラベ・デュボスの卓見によって創作を思い立ったことはほど確實であるし、ラベ・デュボスの意見が發表されたのはヴォルテールのバスタリュ出獄（一七二八年四月）後のことであるからだ。しかも作品の内容からすれば、これが獄中において書かれたと推定される個所を發見することはほとんど不可能である。若冠廿三歳の血氣にはやる反逆兒が獄中の苦惱をかくも無視しえたとは到底考えられないことであり、否むしろ、出獄後といえども、その體驗を作品中に盛り上げていたならば、より傑作が生れたであらうとすら考えられる。といつても何か雄大な敘事詩を書きたいという莫然たる構想が以前からヴォルテールの心の中に芽生えていたであらうことまでも否定することはできない。そういうことも大いにありえたであらう。

論をさらに確定的な事實の上に立って進めるならば、同じくミヌール公爵夫人に宛てた書簡の中でヴォルテールは「われわれの詩（ラ・アンリアード）は一向に進歩しない」と嘆いていたのであるから、この書簡が書かれた一七一九年の或る時期においてその創作は除々に進捗しつゝあったことだけは事實なのだ。また一七二〇年一月二三日付 J・B・ルソー宛ての書簡でヴォルテールは「アンリ四世に關する詩が貴方にとって無關心たりうるものでない、とブルトゥイユ男爵が私に知らせて下さいました」と述べている以上、すでに一七二〇年初めまでには一應他人に見せて恥しくない程度原稿が出来上っていたことは事實である。それから多くの訂正加筆を経て一七二三年友人チリオの配慮によってルーアンから初版が出版されたのである。その表題は左の通りである。

La Ligne; ou Henry le Grand, Poème épique.
Genève. 1723.

發行地はジュネーヴとなつてゐるが實際はルーアンであり、題銘は「同盟」(副題アンリ大王)となつてゐるが後の版においては「ラ・アンリアード」と改められた。

そのうちの何部かが「奇蹟的にはじめてパリに入りこんだ」(一七二四七月二十日付、チリオ宛書簡) そうであるから、この作品が當局の監視の眼をくぐって秘かに誕生したことは申すまでもないことであろう。すでに一七二二年の末チリオ宛の書簡でヴォルテールはこう警戒しているのである。

「私は今のところ私の詩の中で検閲官に反撥を起させるような餘りにも厳しい眞實の個所を和らげることに専念しています。私はフランスで發賣許可を得るため出来るだけのことをするつもりです。ですから貴方はこう宣傳して下さい、印刷はこの國(フランス)で行われますから、豫約購讀の方々はなんら御心配には及びません、と」。

だがルーアン版は書店の不備怠慢のためにヴォルテールの満足を得ることはできなかった。しかも十歌章から成立すべきところを九歌章しか出版されていなかった。おそらくそれはヴォルテールも承知のはずであろうから、何か出版を急ぎすぎた理由が存在したはずだ。ルーアン版が未完成なものであったことをヴォルテール自身

こう述べて裏書きしている。

「私はどうかと申せば、やっと私の詩をやり終えたところですよ」。(一七二四年八月二四日付、チリオ宛書簡)

やがて有名な騎士ロアンとの事件で再び、バスチーユに投獄(一七二六年四月末)され、同年五月二日には出獄して、間もなく英國へ渡った。一七二六年十月付ロンドンからベルニエール夫人に宛てた書簡は「ボリングブルック家より」と記されている。これより二ケ年にわたるヴォルテールの英國滞在がはじまるのだ。ここで再び「ラ・リーグ」は「ラ・アンリアード」と改題されてロンドンから出版された。ブリティッシュ・ミュージアムのカタログによれば、一七二八年のロンドン版は二種類存在することになっている。

(1) La Henriade [In ten cantos] Londres, 1728, 4° [640, 1, 4]

(2) Seconde édition: revue, corrigée et augmentée de remarques critiques. Londres, 1728, 8° [1065, K, 3]

一七二八年四月十六日付スウィフトに宛てた書簡には

「ボリングブルック卿は貴下にラ・アンリアード一部をお送りすることを引受けて下さった」と書かれていますが、これは右のうちのいずれかの一部を指すものであるう。

このロンドン版が一七二三年のルーアン版より優れているのは、第一に九歌章が十歌章へと完成されたことであり、第二にヴォルテール自ら印刷を監督しえたことであるが、さらに重要な事は、この版に挿畫が含まれたことである。ブリティッシュ・ミュージアムのカタログはそのことに觸れていないが、私はジュネーヴのヴォルテール研究所長ベスターマン氏(註五)からの教示によってその事實をたしかめることができた。このことは一七二二年九月一日付チリオ宛ヴォルテールの書簡によって豫想されていたことである。すなわちヴォルテールは同書簡の中で「ラ・アンリアード」の若干の場面を畫いた版畫(エングレーブ)を挿入するという計畫を友人チリオに知らせているのだ。そこにはコワペル Coiper、ガロッシュ Galoches、デトロワ Detrou、ピカール Picard という四人の畫家の名が擧げられ、それぞれの畫家に依頼すべき歌章と場面が指摘

されている。この計畫がそのままロンドン版において實現されたかどうかは、いまだロンドン版を入手しない私には斷定できないが、この事實が「ラ・アンリアード」解釋の重要な鍵であることは否定できない。

また一七二三年のルーアン版が當局の厳しい追究の手を逃れてパリに入りこむことができたように、一七二八年のロンドン版もフランスに入ることは極めて困難なことであった。すなわちその一例を引用するならば、英國から郵送されてきたデメゾー Desmaizeaux の「ビエール・ペール傳」の包装紙としてロンドン版の「ラ・アンリアード」(四ッ折版)が使用されていた。實際カレーではロンドンから到着した「ラ・アンリアード」が何部かフランス官憲によって沒收されたそうであるから、上述の配慮は當然のカモフラージュと考えるべきである。以上は「ラ・アンリアード」が決定的な出版を得るまでに辿った大體のコースである。

註(一) ロンドン版には一七二八年だけで二種類(四折版、八折版)存在する。(ブリティッシュ・ミュージアムの目録より)

註(二) 「アンリ四世についての詩と貴女にたいする私の愛情こそ現在私の知りうる唯二つの生き／＼とした感情です。」

註(三) 《Collections des auteurs classiques Français et Latins》とて一書の一部として出版された。

註(四) フリテイシエ・ミュジアムの目録「アルエ」の項参照。

註(五) 英國人だが、現在ジュネーヴのデリースにヴォルテール博物館及び研究所を私財を投じて設立し、その館長及び研究所長としてヴォルテール研究に専念、一九五三年以來ヴォルテールの畫期的な書簡集(全部で六十卷になる豫定)を編集しつつある。彼の研究成果はロンドンの International foreign books からすべて出版されている。

註(六) cf. Desnoïsterres; *La jeunesse de Voltaire* (1871), p. 424.

三

「ラ・アンリアード」はナヴァル王アンリ・ド・ブルボンがフランスの王位を獲得するまでの事件を歌いあげたものである。サン・バルテルミーの殺戮によって火蓋を切られたフランスの所謂内亂は、カトリクス・ド・メヂシスを陰の人としてフランソワ二世、シャルル九世、

敘事詩「ラ・アンリアード」

アンリ三世の三兄弟を渦中にまきこんだ宗教的對立であるが、アンリ三世によるギーズ公の暗殺によって事態は新教徒と舊教徒の對立よりも更に政治的對立へと變貌したのだ。「ラ・アンリアード」はアンリ三世がナヴァル王(後のアンリ四世)に援助を求めてきた時期から筆を起されている。つまり最初から驚くべき矛盾が存在したのである。ギーズ公の遺子マイエンヌ公の復仇の手から逃げ出してきた舊教徒アンリ三世が當面の敵であるべき新教徒ナヴァル王と結託したのだ。それは宗教的ではなくまったく政治的な妥協であった。パリを追われたアンリ三世はもはや王冠以外の如何なる魅力も持たぬ存在であったから、兩者の間の妥協の代償としてアンリ三世からナヴァル王に示された擔保は王冠以外の何物でもなかったはずだ。この時以來フランスの王冠はナヴァル王の手中に握られていたのである。したがってヴォルテールがアンリ四世の頌詩をこの妥協の瞬間から歌いはじめたことは當を得たやり方と申すべきであろう。

この敘事詩を歴史的に正しく評價するためにはヴォルテールがこの内亂をどう考察していたかを知らなければ

ならない。そのためには「ラ・アンリアード」のロンド
ン版（一七二八年）にはじめて収録された《Essai sur les
guerres civiles de France》「フランスの内亂に關する
試論」を参照する必要がある。この断片的論稿はもろも
ろ散文的だが或る面では「ラ・アンリアード」を凌駕す
る色彩と迫力に富み、ヴォルテールの歴史的思想的立場
をより明確にしたものである。私はこれらの直接的資料
に基づいて「ラ・アンリアード」の内容及び形式を分析し
てみよう。

アンリ三世はナヴァール王アンリ・ド・ブルボンと妥協
することによって王冠を維持しようとしたことはでき
なかつた。なぜならば、彼をパリから追い出したマイエ
ヌ公にはローマ法皇とイスパニヤ皇帝が味方しているこ
とを知っていたからである。そこで彼はナヴァール王を英
國に派遣してエリザベス女王の援助を要請させるのだ。

ヴォルテールは「第一の歌」でアンリ三世をしてナヴァ
ール王アンリにこう語らせてゐる。（註）

《Contre tant d'ennemis ardents à m'outrager

(V. 104)

Dans la France à mon tour appelons l'étranger,
Des Anglais en secret gagnez l'illustre reine.

.....

Je n'ai plus de sujets, je n'ai plus de patrie (V.

111)

Je hais, je veux punir des peuples odieux.》

【意譯】

《かくも烈しく余を傷つける敵にたいし、

余もまたフランスに異人を呼びよせん。

名にしおう英女王にひそかに取り入りたまえ。

.....

もはや余には臣下もなく祖國もなし、

余はおぞましき民衆を憎み罰さん。》

祖國と國民を失つた國王が外國の援助の下に自己の王
冠を守らんとする二重の裏切行爲が鮮やかに描き出され
てゐるのだ。もっとも、この國王の命令を受けてナヴァ
ール王が英國にわたってエリザベスに援助を求めるといふ

たヴォルテールの筋書はまったくのフィクションにすぎない。にもかゝらずこのフィクションは文學的眞實として生きている。さらに筋を追うならば、ナヴァル王はエリザベス女王に謁見を許されて祖國の窮狀を訴えることになっているが、ヴォルテールはエリザベス女王をしてナヴァル王にこう語らせている。

《Reprenez-moi vos malheurs, et vos heureux exploits; (V. 375)

Songez que votre vie et la leçon des rois》

【意譯】

《妾に貴下の不幸と勳功を語りたまえ、

貴下の生活は國王の教訓たるを思いたまえ。》

つまりヴォルテールの言わんとするところは、一國の君主の運命にたいして他國の君主たる者は無關心たりえない、したがって一國の君主の運命は他國の君主のそれと同一である、ということだ。したがってヴォルテールはフランスの内亂が決してそれにとゞまらず全ヨーロッパ

敘事詩「ラ・アンリアード」

と戦争へと發展せざるをえなかった原因をはっきり看破していたのだ。

かつてヴォルテール處女作である悲劇「エディプ」について書いた「エディプ」という作品は正しくは第一幕で終るべきかも知れぬ」と。この自己批判は第一幕においてすでに終幕を豫想させる古典主義悲劇の場合とりわけ當てはまるものであるが、「ラ・アンリアード」の場合にも充分に當てはまる言葉である。したがって本敘事詩が悲劇性を有するものであってみれば、それが悲劇的形式を辿ることは必然であろう。このことは或いは結果でしかないかも知れぬ、なぜならば、ヴォルテールは本來悲劇詩人なのだから。いずれにしても、「ラ・アンリアード」を所謂敘事詩としてではなく古典主義悲劇の一變型と見なすことは見當はずれではない。故ランソン教授が「ラ・アンリアードには古典主義的規レギュラリティ整がある」と述べたのは、以上の特質を衝いた評言であろう。私はこの問題と関連して「第一の歌」から一人の重要な登場人物を取りあげてみたい。

De tous ses favoris, Mornay seul l'accompagne,
(V. 150)

Mornay, son confident, mais jamais son flatteur.

【意譯】

彼の寵臣すべての中よりモルネひとり彼に従う、
モルネは彼の親友なり、追従者にあらず。

英國に赴くアンリに従うのは部下のモルネひとりであった。ヴォルテールは初版においてモルネの代りにシュリ Sully という人物を配したが、それは當時ヴォルテールが親しかったシュリ公爵にたいする友情からであったと言われている。一七二八年ロンドン版以後においてはモルネがシュリの代りに登場することになった。ヴォルテール自身の「覺書」によれば「デュプレシス・モルネは新教徒陣營の中でも最も有徳偉大な人間であつて一五四九年十一月五日ビュイ Baby (Buis) に生れた。彼はラテン語やギリシヤ語に完全に通曉し、ヘブライ語も人の知りうるかぎりのことを知っていた。このことは當時の貴族の間で大變なことであつたのだ。彼は自己の宗教

と主人とに筆と劍を以て仕えた。アンリ四世がナヴァル王であつた時エリザベスの許へ使わしたのは彼（モルネ）その人であつた。……アンリ四世が改宗するや、デュプレシス・モルネは彼を激しく非難して彼の宮廷から身をひいた。人は彼をユグノーの法皇と呼んだ。この詩の中に述べられた彼の性格のすべては史實に合致するものである。」^(註三)したがってヴォルテールは歴史に一層忠實であろうとして友情への思惑を切捨てたのである。だが私にとって更に興味あるのは、古典悲劇にかならず登場する主人公に忠實な脇役をモルネのうちに見出しうることである。これはアンリの敵であるギーズ公の息子マイエンヌ公にも忠實な騎士ドマール Daumale を配したことと對照すればヴォルテールが古典主義的な人物の配置によつて如何に劇的效果をねらつたかを知ることができよう。

また以下の「ノート」は何を意味するであろうか。「おそらく讀者は、作者が筋の統一を重んじなければならぬ詩篇の中ではアンリ大王のあらゆる戦闘に言及しえなかつたことを充分に感知するであろう。」^(註四)事實、ヴォルテ

ールは筋の統一という古典主義演劇の一大原則に従って素材の取捨選擇と文學的虚構を敢えて行っているのだ。以上の觀點において本敘事詩を見るならば、その古典劇的性情をかなり強く認めることは行過ぎではなからう。

さらに「第一の歌」からもう一つの重要な事柄が取りあげられるであろう。それはアンリが到着したエリザベス治下の英國にたいするヴォルテールの描寫である。初版本（一七二三年）では彼が英國にわたる以前であつたから英國の描寫はきわめて抽象的であつたが、ロンドン版（一七二八年）ではウェストミンスター寺院やロンドン塔をはじめ多くの見聞が利用されているのだ。この訂正加筆は當然のことであるが、こゝに批評家たちが一致して指摘している或る問題が存在するのだ。それはヴォルテールがエリザベス治下の英國として描いたのは實は彼自身が見聞した十八世紀初頭グレゴリー一世時代の英國の姿であるということだ。おそらく批評家たちはそこにヴォルテールの時代錯誤を非難しているのであろう。しかし私はそう速断はできない。なぜならば、過去の歴史的素材に基く如何なる作品といえども作家の生きていた時

敘事詩「ラ・アンリアード」

代によって多少とも制約を受けなければならぬし、ましてその作品に幾分でも諷刺的意味が含められている場合は、そこに見られる時代錯誤を簡單に非難しえないからである。だが私はそうした一般論によってヴォルテールを辯護しようとするのではない。むしろ私は上述の批評家たちとは別な角度からヴォルテールを責めたいのだ、すなわち、英國の描寫はロンドン版（ヴォルテールが英國滞在中に出版された）のテキストにおいてもなお觀念的抽象的な性格を脱しきれずにいるのである。このことは「ラ・アンリアード」とどまらずヴォルテールの全作品についても言える缺陷なのである。

最初述べたように「ラ・アンリアード」は一種の君主論である。しかも君主教育論なのだ。すでに「第一の歌」から登場するアンリの父親ルイの亡靈はたえず息子の行爲を見守りながら、行き過ぎを戒め、絶望から振り立たせ、「第七の歌」では息子を天國・地獄・運命の宮殿へと伴って善徳および悪徳の報いを教え未來を戒めているのだ。また「第九の歌」ではアンリとエストレ夫人との逢引に關する官能的な場面が展開されるが、そこにも例

の賢者モルネを登場させてアンリの浮氣を責めさせている。したがってヴォルテールはアンリという未完成な人間を天上からの教育（父親ルイによる）と地上からの教育（忠臣モルネによる）という両面から描き出しているのである。こうしたヴォルテールの教育的な意識はアンリにのみ向けられているのであって、その他の場面においてはかならずしもそうではない。たとえば、「第八の歌」で戀人を戦場で失った女性がその死骸に泣きついで狂死する様を描くヴォルテールはシエクスピアの「ロミオとジュリエット」を手放しで模倣しているかのようだ。

Elle tient dans son bras ce corps pâle et sanglant, (V. 283)

Le regarde, soupire et meurt en l'embrassant,
【意譯】

彼女は青ざめ血まみれの體をいだき、
そを見つめ、嘆き、抱擁しつゝ息たえぬ。

一般に「ラ・アンリアード」はアンリ四世の寛容の精神を謳歌したものであると見なされているが、果してそうであるか。なるほどヴォルテールは「第二の歌」の冒頭においてアンリをしてエリザベス女王にこう語らせているのだ。

«Reine, l'excès des maux où la France est livrée
(V. 1)

Est d'autant plus affreux que leur source est
sacree:

C'est la religion dont le zele inhumain

Met à tous les Français les armes à la main.

Je ne décide point entre Genève et Rome.」

【意譯】

「女王よ、フランスが投げこまれてゐる極度の不幸
は、

その源の神聖なるが故に一層怖るべきものである。

それは宗教にたいする非人間的な熱情が

あらゆるフランス人の手に武器を取らせたのだ。

私はジエネーヴとローマのいずれにも加擔しない。」

この言葉を注意して検討するならば、われわれは一見宗教的中立とみえるアンリの態度のうちに多くの矛盾を見出しうる。もし宗教的寛容を説くとすれば、なぜ外國の援軍まで求めて祖國を荒さなければならぬのであるうか。私はそこに作者ヴォルテールの思想を見出しうるとしてもアンリの本心を見出しうるとは思わない。しかもアンリは「第八の歌」の中でパリ郊外に敵軍を破って幾多の捕虜を得た時に彼らに向つてこう述べてゐるのだ。

《Soyez libres, dit-il, vous pouvez désormais (V.

154)

Rester mes ennemis, ou vivre mes sujets,

Entre Mayenne et moi reconnaissez un maître,

Voyez qui de nous a mérité de l'être :

Esclaves de la Ligne, ou compagnons d'un roi,

Allez génir sous elle, ou triomphez sous moi ;

敘事詩「マ・マントロー」

Choisissez.》……………

〔意譯〕

《汝らは自由にふるまへ、爾後、汝らは

余の敵にとどまることも余の臣下として生きること
もできる。

マイエンヌと余といずれかを君主とみとめよ。

余ら二人のうちいずれが君主たるに適しきかを見
よ。

同盟軍の下で奴隸となるか、國王の友となるか、

同盟軍の下で苦しむか、余の下で勝利者となるか、

いずれかを選べ。》……………

「奴隸と自由のいずれを選ぶか汝らの勝手である」と言われて「奴隸を選びます」と答える者があるうか。これは自由の名において自由を束縛するものである。ヴォルテールがいかなる意圖を以てアンリにこう發言させたのか断定することはできない、結果的にみれば（特に現代的觀點に立てば）アンリの言う自由が自由にあらずることは明白である。まして先の中立的態度との間には

隔絶せる矛盾が生れてくる。この大きな矛盾に次ぐ矛盾をヴォルテールの思想の未熟さと取るか或いはヴォルテールがアンリに見出した矛盾と取るかという所に、われわれにとっての現代的問題が提起されてくる。

こうした王冠をめぐる貴族たちの鬭争の中で最大の犠牲を強いられたのは民衆であつた。とりわけアンリ四世軍に包圍されたパリ城内の市民たちの悲惨な光景の描寫〔第十の歌〕はおそらく「ラ・アンリブード」全歌章中でもっとも悲劇的な場面であらう。戦争を唯一の職業と考へ自らの血を賣つて代償を求める外國の傭兵供 *Barbares dont la guerre est l'unique métier, et qui vendent leur sang à qui veut le payer* (V. 265) は専横な貴族と狂信的な僧侶とによつて死と飢に追ひこまれたパリ市民たちを一層絶望の底にたゞきこんだのである。ヴォルテールはそうした野蕃人供に最後の一片のパンを略奪されてしまった一人の母親が彼女の息子を自らの手で殺害するという場面を當時の史實から掘り起してみせる。悲惨な母親の絶叫を引用するならば、

« Cher et malheureux fils que mes flancs ont porté, (V. 187)

Dit-elle, C'est en vain que tu reçus la vie;

Les tyrans ou la faim l'auraient bientôt ravie.

Et pourquoi vivrais-tu ? pour aller dans Paris,

Errant et malheureux, pleurer sur ses débris,

Meurs, avant de sentir mes maux et ta misère;

Rends-moi le jour, le sang, que t'a donné ta mère;

Que mon sein malheureux le serve de tombeau,

Et que Paris du moins voie un crime nouveau. »

〔意譯〕

「わが胎に宿りし愛しき幸うすき息子よ、」

と彼女は言う、汝が生を稟けしは果かなきかな。

暴君はたまた飢餓によりて程なく汝が生は奪わるべし、

しかるに何故に生きるぞ。そはパリに赴きて、

その殘骸の上を、さまよひ、わびしく、涙するためか。

妾の苦しみと汝の不幸を知る前に死ね、

妾の苦しみと汝の不幸を知る前に死ね、

汝が母より汝に與えられし生を血を妾にもどせ、
妾の不幸なる胎は汝の墓と化し、
かくてバリは新たな罪を見出さん。』

この苦境にありながらバリ市民たちは頑強に抵抗しつづけた。さすがのアンリ軍もバリを遠まきにして時機の到来を待つより外なかった。そして遂にバリは開城した、しかし落城したのではなかつた。なぜならアンリは王冠を獲得したが自己の改宗によって大義名分の一半を失ったからである。生涯バリを愛したヴォルテールがこのバリ市民の英雄的な抵抗に寄せる限りなき愛情は、大革命やバリ・コミューヌや反ナチ抵抗運動を生んだバリの偉大な歴史を思う時、われわれに深い共感を起させるのである。

またヴォルテールが本敘事詩において最大の讃辭を惜まなかつたものはバリ高等法院の中正な行動であった。

Dans ces jours de tumultes et de sédition, (V.

393)

敘事詩「ラ・アンリアード」

Thémis résistait seule à la contagion :
La soif de s'agrandir, la crainte, l'espérance,
Rien n'avait dans ses mains fait pencher sa balance :

Son temple était sans tache, et la simple Equité
Après d'elle, en fuyant, cherchait sa sûreté.
Il était dans ce temple un sénat vénérable,
Propice à l'innocence, au crime redoutable,
Qui, des lois de son prince et l'organe et l'appui,
Marchait d'un pas égal entre son peuple et lui.

〔意譯〕

この混亂騷擾の日々にありて

この病害に抵抗せるはテミスあるのみ。

勢力擴大の野望、恐怖、希望、

なんら彼らの均衡を失わせるものなし。

その寺院は汚れを知らず、公平の女神、

一人彼女にのみ己の安全を求めたり。

この寺院にこそ高等法院があった。

正直の味方、罪惡に苛責なき彼らは、

國王の諸法の組織であり支えてであり、
國民と國王の間を平等な足どりで歩む。

勿論こうしたパリ高等法院の憲法精神はパリ城内のマイエニス軍やそれを支持するソルボンヌ大學神學部その他の舊教系坊主どもから烈しく非難されたが、彼らはただ沈黙を以て彼らに應酬し、遂に院長アルレ以下ド・トゥ、モレ、スカロン、ポチエ、ロングウイユ等々高等法院のメンバーはすべてバスチーユに投獄された。しかしこうしたパリ高等法院の態度を城外に追ったアンリ四世にたいする好意と見なすことは、先にのべたパリ市民の抵抗をアンリ四世にたいする敵意と見なすことと同様、大いに問題である。というのは、すくなくとも文學的にみるならばヴォルテールの筆鋒はパリ高等法院およびパリ市民が一寸見相反する行動をとりながらも一つの大きな共通點（彼らがナヴァル王アンリとマイエニス公のいずれが王位につこうとフランスは救われないと豫感していたようにみえること）を有していたことを感知させるのだ。これはあくまで文學的且つ現代的解釋であるが、

作品が作家の意圖を超えて後世に生きうることを考えるならば、「ラ・アンリアード」もそうした解釋の可能性を充分に含んでいると私は考えたい。

註(一) 以下に引用する「ラ・アンリアード」の引用詩及び行數は左の版に従う。

Œuvres complètes de Voltaire, Paris, Hachette, 1893. t. 7.

註(二) cf. Lettre V sur Œdipe, (éd. Hathethé t. I, p. 24)

註(三) cf. La Henriade, poème par Voltaire avec les notes, suivi de l'Essai sur la poésie épique, Paris, 1813. (P. 184)

註(四) *ibid.*, (Note) p. 225.

註(五) パリ高等法院の英雄的な行動については主として「第四の歌」に述べられているが、ヴォルテールの高等法院にたいする態度は後にかなり修正される。カラス事件等の一連の宗教的迫害の辯護に立上った後年の彼は高等法院をきびしく批判する。また一般的に彼の高等法院にたいする態度は彼の「パリ高等法院の歴史」[Histoire du parlement de Paris (1796)]を参照しなければならぬ。この問題は紙數の都合で深くふれることができなかったから、稿を改めて特に論じたい。